

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	天理大学附属天理図書館蔵『よひの雨』『立聞』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.11 (1989. 6) ,p.55- 60
JaLC DOI	10.14991/002.19890600-0055
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19890600-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天理大
学附属 天理図書館蔵 『よひの雨』 『立聞』 翻刻

石川 透

例言

一、本翻刻は、天理大
学附属天理図書館蔵『よひの雨』『立聞』である。本

二作品は、国籍類書のうち、目録題を『落窪物語抄』とする一冊本に収められている。『落窪物語抄』に収められた作品群、並びにその書誌については、本誌第八号・第九号を参照していただきたい。

一、本二作品は、従来『十番の物あらそひ』として知られていた室町時代物語の異本である。本二作品を含む『十番の物あらそひ』の書誌上の問題、並びに諸伝本の性格については、拙稿『十番の物あらそひ』の諸伝本（『汲古』第十六号）を参照していただきたい。

一、翻刻に際しては、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、段落は原本通りに区分し、私に句読点を多く施した他、（ ）をもってママを示した。

一、最後に、翻刻掲載の御許可を賜わった天理大学附属天理図書館

に厚く御礼申し上げたい。（天理大
学附属天理図書館本翻刻第四九四号）

よひの雨（内題）

やふしわかねは、春の日かけは八重葎、しけれるかにもさし入て、古巢をいつる鶯のごゑ、たゞこしもとちかき谷の戸にさえつり、峯の嵐長閑にて、軒端の梅うちにおひたる躰、たれとはるへきならねとも、うときも人のとはひけんも、ことはりにおもひしらすゝ比になん、此夕より降つる雨猶やます、いとしめやかなる宵のほど、つれ／＼慰めかたきまゝ、各物をもいひかはす人の、あらまほしきさまをいひあへるに、みるめよりはしめ、心まで思ふさまにたらひたる人の、すへて有へき世ならねは、たゞ一かとも思ふすちあらん様をとて、心／＼にねかひて書付ぬるに、夏ひきのいとみたりかはしく、いつれによるへきふしもみえねは、左右にわかつて、しかまにそむるかちまけを定へしとぞ。

一番左

しなにもよらしみるめもいわし、心つかひゆへありて、きやしやに

やさしく、何となくしいてん事もよはぬきはに、あらきやしやおほえ、月花紅葉の折く、哀なる夕かなしきあしたのそらにもなさせすくさす、こすみうす墨書なかしたる水くきの跡まち見て、みなれ木のいたくみなればせし、いりぬるいその草まで、玉さかに待見ん時は、我もこゝろつかひせられ、いかにせんとおほえん人そ、おもしろかるへき。

右勝

をらは落ぬへき秋の上の露、ひろはゝ消なんとするたまさゝの上のあられば、心をかたてたのもしけなし。たゝ情のかたきやしやなるすちはをくれたりとも、松山の波こさゝ覧人のみる目あかぬ事なくうつくしく、霞のうちのかはさくらをみる心せんに、千代萬代とちぎらはや。

左月雪、右あけほの、とりくにていつれと定かたけれど、霞の内の花なさけをくれんこそ、桜のなをりねんなき心せめ。

貳番 左

わつらはしく心とりにくけなるはうるさし。何事もやすくとして、くちをしく物いひはなやかに、にきはゝしき人そよかるへき。

右勝

其人獨をさためてはむつかし。たゝ時にしたかひて、とも角もありなん。そのうちに心とまりておほえん人の、ぬしつよくせきもりの隙をまつほと、うちぬる夜なくて、心つくしの忍ふ山にまよはん程こそ、わりなきこゝちせめ。

忍ふ山にまよはんは、まことおもしろかるへし。

三番 左勝

みるめはいつくもわろきによれるを、おくゆかしくしめやかにもて

なして、ことすくなにのこりおほく、いへはえに心ふかけならん人は、すくれておほゆへし。

右

左耳心ふかけならん人もむつかし。たゝみるめたにくからすは、ひく手餘多なりとも、われをつゐのよるせにして、いとふ心なくは、浮もつらきも忘れられておほゆへし。

左勝へきにや。

四番 左持

ふりも見るめもおもふやうになくとも、心つかひしとく敷うしろやすく、外ゆくなみの心ならん人は、うちとけられぬへき。

右

顔みるめはいかさまにもあれ、ふりきやしやに上すめきて、色このみかちに、しやうとくおもしろきけしたる人そよき。

左はうちとけ過、右はこにくけしたり。如何様勝まけ定難し。

五番 左持

ぬしつよき人を心つくしの床の山にて、夢のまくらをむすはん程の、あこきか浦のためしひきいて、あちきなくしからみつよからんほと、あさきせならて、我かたふかくなりまさらんそ、面白かるへき。

右

人にとかめられすして、色ある落葉をひろはゝや。

床の山に引かへ、落葉を御ねひ候哉。されとも、勝まけおなし程とや申へき。

六番 左持

同しなみならん人はめつらしけなし。月のうちのかつらを、およは

ぬ枝なりとも、雲にかけはしわたしえて、たくひなきひかりを袖にうつして見はや。一夜なりとも此世の外迄の思出よ。

右

およはぬ枝は手折らんもてつゝなり。かけの下草とて、およひくたされんも心持あし。たゞをなし程の人にいつもそひたくもなし。又海土のさ衣まとはならむも、しほれかちなるへし。吹かふかせもちかき程にて、心もとなからぬ程にいひかわさはや。

左雲井迄おもひあかりて、類なき月の光に袖をかわさん程、誠に
おもひてなるへし。右の下葉も理りしられて、是も持とぞ申へ
き。

七番 左持

人のむすはて、またうらわかき初草もかな。

右

森の下草老ぬとも、代なれたらん人の奥ふかくかとありて、うらやむへき事をもにくからぬ程にうちかすめ、人のすへこすなみをも、海土のかるもにすむ虫の名をかこちなとして、恨とをさす別をしらてあらはや。

左は在中将のむすはんことをうれへけん初草も類なし。又代なれたる人の森のかけゆかしくおほゆれば、此草あはせもいつれと申かたし。

八番 左勝

瀬々のむもれ木願れて後は、あひみえ見ても又あふよまれなる夢のうちにまよひて、年月ふるともうへはつれなくて、には鳥の下にかよふと人しられし。

右

いつもそはゞや。時／＼そへは夢の世やたゞ。

あふよ稀なる夢のうちに、浮身をさめぬ代かたりも、おもひしられおもしろや。

九番 左持

花かたみめならぬ人あまたあらん程、いつとなくめうつりして、おもしろくおほえんを、同じ所にへたてなくて、明るも暮るもしらすして、いつとなく御さかつきうちおかて、こうたましりにあそはゞや。

右

光源氏のやうに色好みならんに、紫のうへの御覧のやうに、すく
れておほゆれと、さしあたりめうつりせん。

十番 左

をなし江のたなゝし小ふねはこゝろとめし。たゞいつとなくよせては帰るうき舟に、月なみにひとり／＼とりかへはや。ぬしは何とやうにもあれ。

右勝

何とおもひ定むへき心持もせず、たゞ此事ともを人比／＼しりてすきはや。

よせては帰る浮舟うか／＼しくや。右残なき御ねかひよしあしはしらねと、有て世中はてのうければ、しりて過はやはけに面白く候。

扱も降くらす雨のをと、そらにきこゆるかくのこゑ、袖に吹風につけても、七ちうの木かけおもひやられて、むらさぎの雲のむかへをまち得て帰るに、此御ねかひどもにしゆす打をき、筆とりむかひ候に、めさめて是もほんのふそくほたひにて、我願におほしめすまゝ

御ちぎりありて、只今の勝まけも筆のけちえんによりて、御いのちの後には、また松山の波もたかしの池隔なく、くらむるのうへにたくひ、風におつる萩の露も蓮の上の玉とみかき、此しゆと友にひとつうてな縁を結び、同じ菩提心をおこしなから、佛の道に入なんと也。

立聞(内題)

若き女餘多すむあたりに、いとすき心ある男、つねはかひま見立きし給ふを、うちにはいかておもひよるへき、打とけ物語し侍ける。

一、かすめる空の気色、いとえんなる夜のさまかな。哀昔の光源氏頭中将のやうならむ男に、青海波舞せて、又さ衣の中將のやうならんおとこに、笛ふかせて、をのくそうそくかけて見はやといふ。
二、又そはなる人、我はた、六条院の御かたの物のをとぎし給しやうに、ことにもむらさきのうへ、あくまで匂ひくはよりて、霞の間より咲出たるかはさくらを見る心持して、はこんをなつかしうひきあわせ給ふに、あるしのうへは、いとさまやうもつけて、五月まつ花たちはなの花もみも、くしておりたるともいふへきさまして、つかひなしたるひはのはちおと、めつらしうきこゆるに、女三の宮は、二月計の青柳わつかにしたりはしめて、鶯の羽風にも乱るへき風情にて、琴ひき給ふに、女御宮をなしやうなる御なまめきすかた、今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくよしありて、よくさきこはれたる藤の花の松に咲かよりて、かたはらにならふ花なきやうにて、さうの御琴ひき給ふ。あはれにすみのほりて

きこゆるに、又大将の御子公達の吹合せ給ふ笛の音、をいさきもおもひやられて、をのくおもしろう珍敷御あそびを、かたはらにてきはやといふ。

三、又すこしあされはみたる声にて、それをかたはらにてきゝあたらんは、中くうやまし、何事もわか身にあらぬは、なにのかひかは侍らん。女御后も中く心苦し。関白の北の方なといはれて、おのこ三人女三人持て、壹人をは后にたて、玉の臺にすへ置、又はやん事なき人にもてなさせて、男をはとりくに殿上せさせて、きよけなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしうもあらんといへは、

四、うしろなる人、それは餘に作り付たらんすくせのやうにて、聊をかしきふしも有へからず。たとへは光源氏にても在五にても、いはひ傳へしやうに、かたちなまめいたる男におもはれて、少都はなれたる所にすへをかれ、しつかなる春の曙、淋しき秋の夕には、雲吹風の嶺にみゆらんと詠くらし、たゞならぬ萩の上風に心をうこかし、ふけゆくかねにうらみ、まつ夜なからの月をかこちなとして、たまさかにまち見たらん心持は、いかにめつらしうあかず哀にもあらましといへは、

五、又居たる人、あひえたる中のちぎりは、中くうしろめたき折も有へし。形ちさもあらん人の、とし月をへておもひわたらんを、つれなくのみもてなして、さすかに情なからず、おりくはは一くたりをもみせ、又身つからもうちしきらんおりは、物こしなのけわひきかせつに、猶かくていやましとおもひくらしがたからむ春の日、あかしかねたる秋のよは、有明のそらにもあながちに忍ひかきつらんと、ことさらによしはみ、かみの香なともなへてならぬを、

うちしめりたる花のまくらとつゆもをとさて、また朝ほらけの程に、ちいさきわらわなとしてさし出たらんを、ひきときて見は、なげき侘ねぬ夜の月になど、さま／＼書つくしたるふみの数つもりたらんは、をかしう心あわれにもあらんかしといふ。

六、又かたはらより、それは餘にこは／＼しうねちけたるわき成へし。女のおもひにて、たかきみしかきをしなへて、夕になれあしたに別、かふぶりのひたひ、くつのをと、狩衣の袖、さしぬぎのつま、それかありか移りか香、かれかありさまなど、さま／＼おもひくらへて、しのだの森の千枝のはの数をつくし、顔かたちすこしおとろへなは、伊勢尾のあまに身をやつし、あり家定すうかかれて、或時は大原高根嵯峨の山、伏見深草木幡山、かちにてゆかかん宇治の里、片野の真柴折敷で、淀の川瀬の月もみん、今はた同じ難波渦、彼行平の中納言、藻塩たれにし須磨の浦、光源氏の大將の、旅ねの床の明石渦、舟さしとめん淡路嶋、こゝろ筑紫の文字の関、ひれふる山や松浦渦、我身こそ年は老ぬれ若のうら、塩のさし出の濱千鳥、住吉泊瀬よしの山、花の古江わけて見ん、さひしさをあすかの寺のかねきかん、白なみの名もおそろしや立田山、にしきおりかへ神南山、むかしのことをおもひ出て、幾手餘多の二見かた、かの齋宮の御母息所、振すて／＼と読給ひけん、鈴鹿川をもうちわたり、伊勢の濱荻かゝると、相坂山関の岩かとふみならし、志賀のから崎うち出のはま、彼貫之かえひしけん、むかしなからの山桜、植しことも今は甲斐そなき鏡山、みの／＼中山なか／＼に、あれぬとき／＼しふはのせき、清見か崎田子の浦、うち出て見ん駿河なる、宇津の山辺の鶯の道、なをはる／＼とわけゆかん、扱も猶おもひそ出る富士の山、立し煙もいまははや、たえてそやみし陸奥の、忍ぶの里の果

までも、命あらんかぎり、詠ありき侍らはおもしろかるへしといふに、

七、又ある人、餘それはうきた覺様に侍れば、我かた／＼しなたかくおも／＼しう、さるへき人にみえしなからのそのま／＼に、外行事なく夜かれなく、百とせに一とせたらぬ程迄も、面影はなれず添はやといふ。

八、又わかうなよ／＼か成声にて、あら心やすの御すくせや。忍ぶ山にまよはんこそおもしろからめ。臘月夜の内侍のかみ、木からしの吹につけつ／＼松嶋になどをとろかし、女三の宮の煙くらへなとさまにはかなき中にて、命もたゆる迄恋侍て、袖のしからみつ／＼みかね、枕より又しらせしとおもふこそ、哀も浅からねといふに、

九、あな心苦し。我はた／＼人にもみえし。代々にすまは、春は花のもとにて日を送り、夏は泉にのそみ、涼しき風木の下やみの螢をあわれみ、秋は田表の鷹、野辺の松虫を友として、月をあふきて夜をあかし、嵐にたくへて琴をしらへ、たつ波吹風に哥をよみ、た／＼何となくあらはやといふに、

十、又かたはらより、それは餘物さひしや。しなにもよらし形ちもいはし、釣する蟹の翁なりとも、萬の寶にあきみちて、思ふ事なくあらん外のおもひ出や有へきと云に、

十一、又おくのかたより打なきたる声にて、五障三従の此身を、いかにしてたすからんとはねかひたまはて、た／＼現ともなき事をの給ふこそはかなけれ。電光朝露の陰のうち、何かあり果んと侍、風さはく小篠か上の玉あられ

しはしもみえぬ世をはなけかといふ。そはにあてなるあま君なん、あなそ／＼。かくまでおほし

よれる事に、さらは返かきこえんとて、
たすくへき身をはた更にしられねは
誰ためにかは世をもいとはん
と云に、皆物もいはす成ぬめり。

(了)